

北陸学院大学クリエイショングループの活動と学生の学び

Report of Activities of “Hokurikugakuin University Creation Group” and What Students are Learning

田 辺 圭 子*¹ 瀬 戸 美 江*²

要旨

北陸学院大学クリエイショングループは、北陸学院大学地域教育開発センターの活動の1つとして、2009年に発足した。これまで、本学学生が学校や幼稚園、イベントや舞台、子育て支援などの場で、子ども達のために手遊びや歌、劇、ダンスなどを演じ、交流してきたが、それらの活動を通して学生達が変わる様子が伺えた。

本研究は、北陸学院大学クリエイショングループのこれまでの活動と、参加した学生の学びについて報告するものである。

キーワード：北陸学院大学クリエイショングループ／表現／学び

1. はじめに

本学2階にある教材室には、保育に関する教材が数多く保管されている。教材は年を重ねるごとに多くなり、絵話、エプロンシアター、ペープサート、パネルシアター、紙芝居、絵巻物、着ぐるみなどが保管され、学生ばかりでなく幼稚園、保育園現場の先生や保護者の会、子育てサロン担当者など、様々な人が利用する地域に開かれた場所になっている。

教材室を利用する学生は、主として実習で教材を必要とする幼児児童教育学科の学生達である。幼児児童教育学科の学生の中には、「実習だけでなく、いろいろな場所で子ども達のために演じてみたい。」と考える学生がいる一方、能力はあるのに人前で話したり演じたりすることが苦手なために、実習で苦勞する学生がいる。また、子どもと触れる機会の少ない社会福祉学科、食物栄養学科、コミュニティ文化学科の学生の中には、子どもが好きで「子どもに関わってみたい。」と考え

ている学生や、「自分が持っている何かをどこかで表現できる場がほしい。」と思っている学生が沢山いる。筆者（瀬戸）は、これらの学生達のために教材室の教材を使って、学内に留まらず地域に発信できないかと考えるようになった。たまたま、石川県の子育て支援イベントに学生を10人ほど連れて行ったところ、学生達はこちらが予想していた以上の言葉にはできない何かを吸収してくれ、「また参加したい。」という声が多数挙がった。子育て支援には行政も力を入れており、イベントへの参加依頼は1年を通じて多数ある。学生からのニーズと地域からのニーズ、この2つをつなげるサークルのようなものを作れないかと考え、2009年、地域社会に貢献する北陸学院大学地域教育開発センターの活動の1つとして、北陸学院大学クリエイショングループを立ち上げた。

本研究は、北陸学院大学クリエイショングループのこれまでの活動とその活動に参加した学生の学びについて報告するものである。

2. 「北陸学院大学クリエイショングループ」の活動

(1) 作品について

*¹ TANABE, Keiko

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
健康科学・生涯スポーツ

*² SETO, Mie

北陸学院大学

北陸学院大学クリエイショングループの演目には、手遊びや歌、劇、ダンス、視聴覚教材を用いたものなど様々であるが、その中には教材室に置いてある既成教材だけでなく、手作りのものもある。

絵本「ハンダのびっくりプレゼント」を大型絵巻物に作り替えた作品は、装置（縦143cm、横247cm）、背景・フィギュア（制作：瀬戸美江、相岡郁美）ともに手作りの大きなものであり、本学のオリジナルである。おはなしのあらすじは、主人公のハンダが、友達のアケヨのためにいろいろな種類の果物を、頭に載せたかごに入れて大草原の道を歩いて行く。途中、様々な動物が出てきて、かごから果物を持っていってしまうが、ハンダは全く気づかず歩き続ける。そして、かごの中の果物は全てなくなってしまうが、みかんの木の下を通った時に、ミカンの木にぶつかった暴れ山羊のおかげで、木から落ちたみかんがかごを満たし、友達のアケヨと一緒においしくミカンを食べることができたという。ほのぼのとした作品である。巻物になっている背景が動き、場面が変わることや、お話に出てくる様々な動物のフィギュアの動きに合わせて楽器を効果音として用いることにより、目だけでなく耳でも楽しめるように工夫してある。（写真1）

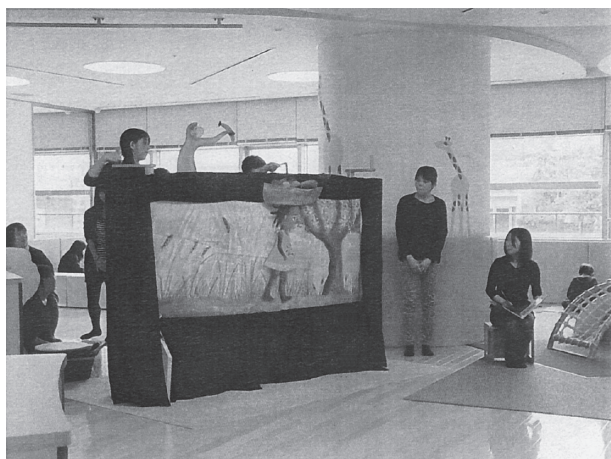


写真1

ラインダンスは、一般的によく知られているラインダンスとは異なり、横一列に並べた椅子を用いた、子供向けのダンスである。テレビ番組ボンキーズキーズラインダンスの「メリークリスマスエブリイワン」を演じたところ、依頼先だ

けでなく、演じた学生からも好評であったため、クリスマスシーズン以外にも踊れる作品として、ディズニー音楽を用いた「スーパーカリグラジスティックエクスペリアドーシャス」を創った。（振付：田辺圭子）

（2）活動について

北陸学院大学クリエイショングループは、活動する学生が特に決まっているわけではない。外部から依頼が来る毎に新たに参加学生を募り、集まった学生達と担当教職員が演じる場所や対象に応じた作品を考え、演じ手である学生の希望も加えながら、一緒に決めていく。

練習は、参加学生全員が集まることができる昼休みや、わずかな授業の空き時間が主になるため、十分な時間を確保することが難しいが、自ら積極的に参加希望した学生達のやる気の高さが時間的な不足を補い、教職員の助言を受けながら実演内容の質を高めていき本番に臨む。

これまで様々な場所で行った活動は全て好評を得ているが、その活動を、1) 学校・幼稚園関係、2) イベントや舞台、3) 子育て支援 に分け、実施日、名称（なければ対象）、場所、内容について以下に記載し、各々の場での参加学生の主な様子を報告する。

1) 学校・幼稚園関係

2009年12月25日

みどり小学校1年生（於：みどり小学校 図書室）

大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」
ダンス「メリークリスマスエブリイワン」

2010年1月7日

新豎町小学校1・2年生（於：新豎町小学校
多目的教室）

大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」
うた「きらきらぼし」

2010年1月18日

石川県立聾学校 幼稚部（於：石川県立聾学校
幼稚部 ホール）

手遊び「はじまるよ」
パタパタ絵本「ケーキ作り」

大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」

2010年2月24日

愛香南部幼稚園園外保育（於：北陸学院大学
ラウンジ）

大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」
ラインダンス「スーパーカリグラスティック
クエキスピアリドーシャス」

みどり小学校、新堅町小学校で行った活動は、「読み聞かせ授業」の前半部分に行った。大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」は、効果音に楽器を用いたことにより臨場感が増したことや、実演後、楽器紹介をクイズ形式で行ったことから、子ども達に大好評であった。みどり小学校では、学生達が演じた後、小学生からお礼の歌を贈ってもらい、学生達は目頭を熱くしていた。私達が実演後後片付けをしていると、クラス代表の子ども達が、教室で書いた子ども達の感想文を持って来てくれ、受け取った学生たちは大感激であった。新堅町小学校では、小学生と一緒に「きらきらぼし」を歌う機会をいただき、学生達は一方的に演じるだけでなく、子供たちと一緒に楽しむ機会を得ることができた。

聾学校幼稚部からの依頼には、手話通訳者に同行を頼み、事前打ち合わせをして臨んだ。大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」について、楽器を持って行くか否かで随分悩んだが、結局通常通りに演じることにした。演じる前、舞台横に置いてあった楽器を見つけた子ども達は、チューバに興味を示し、ラッパの部分に耳を押し当て、何度も「鳴らして。」とせがんできた。楽器に対する子ども達の反応は、こちらが全く予想しなかったものであり、「聞こえないから音の出る楽器は持っていかないほうがいい。」と思うのは間違いであった。耳を押し当て楽器の音を感じている子供たちとのふれあいは、楽器を鳴らしていた学生にとって貴重な経験となり、言葉には表せない何かを確実に感じ取ってくれたようであった。また、この日は授業があったため、学生の参加は少なく、大学OGの方に手伝いをお願いし、学生と一緒に演じていただいた。このように、クリエイショングループの活動は、演じることを通して学

生だけでなく、OGや現場の先生などと一緒に楽しむことが充分可能である。今回の活動を通して今後このような取り組みの必要性を感じた。

本学に園外保育で来た愛香南部幼稚園子ども達のために学内ラウンジで演じた大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」とラインダンス「スーパーカリグラスティックエキスピアリドーシャス」は、いつも学外に出て演じている学生達にとって、見慣れた場所で演じる初めての機会である。最初は「不思議な感じがする。」と言っていた学生達も、子ども達の食い入るような眼差しと先生方の豊かな反応に後押しされ、一生懸命に演じていた。

2) イベントや舞台

2009年10月25日

石川里山里海フェア（於：夕日寺県民自然園）
大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」
ダンス「ややこしや」
演劇部「おばけちゃん」

2009年12月19日

第57回 クリスマスこども大会（於：本多の森ホール）
ダンス「メリークリスマスエブレイワン」
歌と着ぐるみショー「だれにだって誕生日」
「赤鼻のトナカイ」

2010年2月13日

北国こども大会2010（於：七尾サンライフプラザ）
ダンス「スーパーカリグラスティックエキスピアリドーシャス」
タンگرام「はっぱの冒険」
うたとダンス「ホ・ホ・ホ」

2010年2月20日

北国こども大会2010（於：加賀市文化会館）
着ぐるみステージ
ラインダンス「スーパーカリグラスティックエキスピアリドーシャス」
うた「幸せなら手をたたこう」

「だれにだってお誕生日」
うたとダンス「ホ・ホ・ホ」

2010年2月27日

北国こども大会2010（於：輪島市文化会館）

着ぐるみショー
ラインダンス「スーパーカリグラスティックエクスペアリードージャス」
うた「幸せなら手をたたこう」
「だれにだってお誕生日」
うたとダンス「ホ・ホ・ホ」



写真2

2010年3月7日

ご入園おめでとう大会（於：本多の森ホール）

着ぐるみステージ
ラインダンス「スーパーカリグラスティックエクスペアリードージャス」
うた「さあみんなで」
うたとダンス「ホ・ホ・ホ」

2011年5月14日

手つなぎウォーク（於：金沢城三の丸広場）

ラインダンス「スーパーカリグラスティックエクスペアリードージャス」
劇「大きなかぶ」

イベントや舞台で演じる時には、演目と演目の間をつなげるために、司会が必要になる。司会は、その場の状況を判断してプログラムを進めたり、アドリブでつなげたりすることが必要になる。北陸学院大学クリエイショングループが出演するイベントやステージは小さい子ども達が対象のため、どんな反応が返ってくるか予想がつかない。この臨機応変の対応が必要とされる司会を、あえて学生に経験させるようにしている。それは、司会をしてもよいと言う学生は度胸があり、演ずる事に自信のある子が多いが、そのような学生にとって、この緊張感と難しさは、他にはなかなか経験しがたい貴重な学びになるからである。

イベントや舞台で演じる演目は、遠くにいても見えるものや、観客も一緒に参加できるものを選ぶことになる。(写真2) 着ぐるみはその中の一

つであるが、頭には大きくて重い被り物をし、全身を分厚い衣装で覆うため、着ぐるみの中は非常に暑く、少し動いただけでも全身汗だらけになる。そのような過酷な状況の中で普段以上に大きく動かなくにはいけないため、想像以上に難しい。しかし、着ぐるみを希望した学生の多くは、「普段の自分では恥ずかしくてできないことも、着ぐるみを着ることで自分ではなくなるから、どんな動きも出来て楽しい。」という感想を述べる。実際、普段はおとなしく、とても人前に立つことが考えられないという女子学生が着ぐるみを希望したことがあった。大丈夫だろうかと心配したが、舞台上に立ち衣装を着て演じると、最初は小さかった動きがだんだん大きくなり、本番では自分の殻を破り、とても大胆に表現してくれた。舞台終了後、衣装の頭部を外した時の彼女の汗だくの笑顔は、忘れることができないくらい素晴らしいものであった。

ステージという普段とは異なる特別な場を体験することにより、「自分には、こんなことが出来るんだ。」と自分の持っている賜物に気づき、学生が変わっていくことが多い。明るく、大きな動きがすぐにできるような学生だけにメンバーが固定されることなく、様々な学生に参加を促し、これまで気付かなかった自分自身に気付く経験の場としたいと考える。

3) 子育て支援

2009年11月29日

「まちなかほっと子育てサロン」(試行)(金沢市内百貨店)

- 大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」
靴下人形「へび」を用いたダンス
- 2010年1月24日
「まちなかほっと子育てサロン」（試行）（於：
金沢市内百貨店）
手遊び「はじまるよ」、「頭、肩、膝、ポン」
ペープサート「ねずみ君のチョコッキ」
大型かるた取り
- 2010年2月28日
「まちなかほっと子育てサロン」（試行）（於：
金沢市内百貨店）
手遊び「はじまるよ」
紙芝居「まんまるまんま」
エプロンシアター「7匹のこやぎ」
着ぐるみ人形と遊ぼう
- 2010年3月10日
ウインプレイルーム（於：北陸学院ウイン記
念館ホール）
親子のふれあい遊び
大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」
- 2010年6月6日
「まちなかほっと子育てサロン」（於：金沢市
内百貨店）
キーボードを用いた絵本の読み聞かせ
- 2010年11月21日
「まちなかほっと子育てサロン」（於：金沢市
内百貨店）
着ぐるみと子ども達とのふれあい
親子で作って遊ぼう「折り紙の紙飛行機」
新聞紙話「お船」
大型絵本「月曜日にはなに食べる」
- 2010年12月19日
「まちなかほっと子育てサロン」（於：金沢市
内百貨店）
ハンドベル演奏
アカペラ「サンタがまちにやってくる」
「世界に一つだけの花」
ラインダンス「Mr-クリスマス・エブリワン」
- 劇「大きなかぶ」
- 2011年1月30日
「まちなかほっと子育てサロン」於：金沢市
内百貨店
手遊び「コアアラ」
大型紙芝居「あひるの王様」
パネルシアター「ねてるのだあれ」
親子で作って遊ぼう「折り紙の紙飛行機」
- 2011年2月20日
「まちなかほっと子育てサロン」（於：金沢市
内百貨店）
絵本「きんぎょがんげた」
おりたたみ絵本「ふしぎな部屋」
親子で作って飛ばそう「三角形で作る飛行
機」
- 2011年6月19日
「子育て出前サロン」（於：金沢市内百貨店）
ふれあい遊び「洗濯機ぐるぐる」
手遊び「トントントントンひげじいさん」
ダンス「やせろ！チャールストン3世」
エプロンシアター「くいしんぼうゴリラ」
- 2011年6月19日
学生子育て支援事業（於：近江町交流プラザ・
ちびっ子広場）
ふれあい遊び「洗濯機ぐるぐる」
手遊び「トントントントンひげじいさん」
ダンス「やせろ！チャールストン3世」
エプロンシアター「くいしんぼうゴリラ」
- 2011年7月10日
「子育て出前サロン」（於：金沢市内百貨店）
エプロンシアター「大きなかぶ」
大型絵本「たまごにいちゃん」
折り紙「ぴよんぴよんかえる」
- 2011年7月10日
学生子育て支援事業（於：近江町交流プラザ・
ちびっ子広場）
エプロンシアター「大きなかぶ」

大型絵本「たまごにいちゃん」
折り紙「ぴよんぴよんかえる」

2011年10月2日

学生子育て支援事業（於：近江町交流プラザ・ちびっこ広場）

手遊び「はじまるよ」

大型絵巻物「ハンダのびっくりプレゼント」

金沢市は平成22年3月に「みんなで育む子どもの笑顔 子育ての喜びが実感できるまち金沢」の理念を掲げ、『かなざわ子育て夢プラン2010』を策定した。⁽¹⁾ このプランの基本方針③⁽²⁾には「金沢市を担う未来の親の育成と若者の自立を支援する。」が掲げられ、その中の基本施策「次世代を担う親の育成」の具体策の1つとして、「フレッシュ学生まちなかサロン」が挙げられている。これは、金沢市が地元大学と連携し、「地元大学と協働し、まちなか子育てサロンの企画・運営を通じて、学生主体の地域貢献についての実践研究」を行い、「子どもとのふれあいを通して、時代の親の育成」を行うものである。本学は金沢市からの委託を受け、「フレッシュ学生まちなかサロン」の一環として北陸学院大学クリエイショングループが2009年度「まちなかほっと子育てサロン」の試験的な取り組みに、2010年度には「まちなかほっと子育てサロン」に参加することになった。

2011年度は「まちなかほっと子育てサロン」と同様の取り組みとして「子育て出前サロン」の委託を金沢市から受けただけでなく、金沢市近江町交流プラザからも、「学生子育て支援事業」として近江町交流プラザ・ちびっこ広場での委託を受けることになった。

「北陸学院大学クリエイショングループ」の「まちなかほっと子育てサロン」及び、「子育て出前サロン」における活動は、金沢市内百貨店の子供服売り場の一角にある「子ども広場」（12月のクリスマスイベント時のみ同百貨店1Fコンコースで実施）で13時～13時30分と15時～15時30分の2回の実演を行うものである。

毎回、13時～13時30分と15時～15時30分の実演の間の1時間30分は休憩時間とし、学生

達の自由な時間にしてはいたが、なぜかどの学生もこの時間を利用して自主的に反省と互いの意見交換を十分に行い、15時からの実演に向けた準備をしてきた。学生によれば、この時間は皆真剣で必死なのだそうである。事実、13時からと15時からの学生達のパフォーマンスの違いは明らかであり、その上達ぶりには毎回驚かされた。

（写真3）と（写真4）を見ていただきたい。この写真は北陸学院大学クリエイショングループの活動に参加した朗読部学生による絵本の読み聞かせの時の様子を撮影したものである。朗読部の学生には幼児児童教育学科の学生は1人もいない。普段は老人や大人への朗読を主な活動としているため、最初の実演では子どもから絵本が見やすい正面には座らず、子どもの姿や様子に目を向けることもなく、一生懸命絵本を読んでいる。（写真3）しかし、自由時間を経た後、読み手の学生は子どもの方を向き、子ども達の反応を見ながら



写真3



写真4

読んでいる様子がわかる。(写真4) この変化は、学生達の「今まで大人の方に読むときは一方的に本を読んでいればよかったが、子ども達の前で読む時は、子どもの反応を見ながら、読むスピードにも気をつけ、子どもを受け入れなくてはならないことや、子どもは自分の思い通りにはいかないことに気づいた。」という感想にあるように、子ども達から直に受ける素直な反応が大きく関係しており、実演を通して子どもと学生が直接ふれあう経験が学生達を真剣にさせ、子どもへの理解を深めるための一助となることを再認識した。

3. まとめ

2009年に「北陸学院大学クリエーショングループ」が発足して約2年が経過したが、本報告にこれまでの活動をまとめ、改めて様々な活動に参加してきたことを感じた。活動のほとんどは、日曜日または祝日であるが、学生達から不満の声を聞いたことは一度もなく、自ら進んで何度も活動に参加してくれる学生が数多くいた。

「北陸学院大学クリエーショングループ」の活動の特徴は、子ども達や親子の前で、学生が「演じる」ことである。そのために、場の状況、子ども達や親子の反応を想像しながら準備し、本番に臨む。演じ終わった後、学生達が演じている間に感じた様々なことを嬉々として話しているのを聞いていると、学生達は準備してきた内容をただ一方的に出しているのではなく、演じながら子ども達や親子の反応を感じ、それを受けて自分達も楽しむ体験をしていることがわかる。学生達が演じ

ている間、担当者は学生を会場の隅で見守るだけであるが、演じている学生達が回を重ねる毎に上手くなり、自信と余裕を持って演じていることが見ていてはつきりとわかった。これは、学生達が演じながら子ども達や親子の反応を直接感じるにより、自分達の演じた内容に対する反省や次への課題が学生達一人ひとりの中から自然に沸き起こり、次の学びへの意欲に繋がっているからであろう。

本学に勤務し、学生と関わる中で、自分自身のことを上手く表現できず悩んでいる学生に、これまで数多く出会ってきた。時間をかけ、ゆっくりと向き合い、話をするうちにぼつりぼつりと自分のことを話し始め、話すうちにいろいろなものを抱え、本当は自分のことをわかってほしいのに上手く自分を表現できず悩んでいることがよくわかる。このような学生達に対して、ストレートに自分自身を表現することを求めるのではなく、教材などの物を用いて演じることを通して、間接的に自分を表現する体験は重要なのではないかと考える。これからの「北陸学院大学クリエーショングループ」は、そのような学生達も参加できるように、実演を通した子どものための活動を、学科を超えた全ての学生達に今以上に呼びかけていきたいと考えている。

<引用・参考文献>

- 1) 金沢市福祉健康局こども福祉課 2010『かなざわ子育て夢プラン2010[概要版]』
- 2) 金沢市福祉健康局こども福祉課 2010『かなざわ子育て夢プラン2010[概要版]』 p 6